

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 23 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520783

研究課題名(和文)戦後日本の社会生活史と台湾 - 統治下で育った台湾人の日本認識とその変遷の記録化

研究課題名(英文)Reflections of Civil Life in Postwar Taiwan-Recording Imaginings of Japan

研究代表者

大谷 渡(OHYA, WATARU)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：80340644

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、戦後日本の社会生活史との関連において、統治下で育った台湾の人びとの日本認識とその変遷を具体的に記録し、史実に即して解明することを目的とした。

日本統治下で日本教育を受け日本人として育ち、戦争を経験した人たちが、その後の激変する台湾社会で紡いだ人生を、何十人もの台湾の人たちからの聞き取りで収集した口述資料と文字資料、実地調査等の照合検討の上で明らかにし、その成果を『台湾の戦後日本 敗戦を越えて生きた人びと』(東方出版刊、2015年)として出版した。

研究成果の概要(英文)：For this research,I compiled oral interviews of dozens of Taiwanese survivors of World War2,who grew up under Japanese occupation,to investigate their lives during the turbulent times in postwar Taiwan.The interviews were compared and the information was verified through a range of documents collected during my fieldwork in Taiwan.The outcome of this work was published as "Taiwan no Sengo Nippon - Haisen o Koete Ikita Hitobito(Postwar Taiwan after Japanese Occupation-The Complexities of Defeat)"(Toho Shuppan,2015).

研究分野：日本近現代史

キーワード：日本近現代史 日台関係史 社会生活史 文化交流史

1. 研究開始当初の背景

(1) 「祖国でない祖国を信じ、愛したのが馬鹿でした。」とは、戦後 65 年もの間、日本人でありたいと願い続けた元台湾人陸軍看護婦が、私（本研究代表者大谷渡）にあてた手紙に記した言葉である。かつて、川島繁子と改姓した彼女は、たしかに大正生まれの日本人であった。大日本帝国陸軍部隊の看護婦として出征した彼女は、戦争末期の昭和 19 年暮れにルソン島北部山岳地に、命に服して部隊とともにいった。飢えに苦しみ、鉄の雨降る激烈な攻撃にさらされながら勤務につき、傷病兵を看取ったのである。彼女の記憶をもとに、日本赤十字社刊の『遺芳録』や『日本赤十字社史稿』、マニラ会刊『アシンの谷間に』などの基本文献はもとより、全国各地の個人や団体が発行した手記を丹念に調べ、千葉・東京・名古屋・三重・滋賀・京都・大阪・山口・福岡など各地を訪ねて調査した。台湾では、台南と台北の陸軍病院に勤めた元陸軍看護婦を各地に訪ねて資料の収集を行い、広東第一陸軍病院と広東第二陸軍病院に派遣された篤志看護助手たちからの聞き取り調査と文献調査を徹底的に行った。

(2) 平成 22 年 3 月には、研究成果の公表を目的として国際交流研究会「65 年目の証言 - 日本人・台湾人陸軍看護婦とルソンの戦場」を関西大学で開いた。研究会開催の記事は、毎日・京都・読売の各紙に掲載され、とりわけ『京都新聞』は 1 面と 17 面に写真を入れて大きく報じた。当日は市民や学生など来場者は 200 人を超え、翌日の『読売新聞』は、「元陸軍看護婦証言生々しく 関大で研究会」と報じた。来場者からは、「ぜひ研究成果を出版してほしい。」との要望が寄せられ、その後の調査研究の成果を加えて、平成 23 年 8 月に『看護婦たちの南方戦線 帝国の落日を背負って』（大谷渡 東方出版 pp1 - 241）を出版した。同書は出版まもなく日本図書館協会選定図書となり、『産経新聞』8 月 11 日付文化面に「従軍看護婦の証言集め 戦争検証」と大きく紹介され、同日の『京都新聞』も「看護婦が見た南方戦線」の見出しで大きく取り上げた。平成 23 年 10 月 1 日には、元台湾篤志看護助手を特別講演者として招いた関西大学での国際シンポジウム「青春と戦争の惨禍」で、大谷渡が基調講演を行った。毎日・読売・日経・京都の各紙が予告記事を掲載し、来場者は 300 人に達した。

平成 20 年 4 月出版の『台湾と日本 激動の時代を生きた人びと』（大谷渡 東方出版 pp1 - 244）は、平成 16 年以降の台湾での実地調査に基づく研究成果であり、大正期と昭和前期を対象として、民族運動、デモクラシー、戦時下の教育、志願兵と軍属、空襲体験などを克明に叙述した。

2. 研究の目的

(1) これまでの台湾における資料調査の過程

では、日本統治下に育った 60 人を超える人びとから直接取材し、その生の声を記録した。この調査は主に戦前・戦中を対象とし、統治下において高等教育を受けた人びとが「台湾の幸福」をどのように実現しようとし、台湾人民衆が戦時下をどう生きたのかを解明することに主眼をおいたが、取材過程において日本統治を脱して以後の激変する戦後の台湾社会を生きた後半生の重要性に気付かされることになった。台湾語でも北京語でもなく、日本語によってこそ複雑な思考や感情の機微の表現ができるこの人たちの日本の社会と文化への思いの核心やその変遷は、戦後社会での彼らの実生活を知り、心の壁にまで目を注いで初めて、その精神史の全体を把握することが可能となる。だが、このことに着目し、彼らが生きてきた戦前と戦後をつなぎながら文化的精神的内実を具体的に明らかにした史的研究は、台湾においても日本においても皆無に近かった。

(2) 日本統治下において日本教育を受けた台湾の人びとが、戦後の台湾社会をどう生きたのかを社会文化史的観点から多角的に跡付け、その日本認識の核心及び上層部分の変容過程を具体的に解明することが、本研究の主たる目的である。戦中に中等及び高等教育を受けた人たちの中には、戦後復興を経て高度経済成長期に入った日本の社会・文化・経済と深く関わりながら生活の基盤を築き、起業や事業展開を進めた人も多い。現代日本と強い結びつきを持った彼らの生活や日本への思いの変遷について、口述資料と文字資料を収集し分析して記録化することにより、その歴史的意味を問うものである。

3. 研究の方法

(1) 本研究では、研究代表者大谷のこれまでの研究調査とその成果の上に立って、日本統治下で中等教育または高等教育を受け、戦後も日本の社会と深いつながりを持って生きてきた台湾の人たちから口述資料を収集し、これを編集し文章化して分析した。あわせて、手記や手紙、『台湾日報』など戦前・戦後の新聞や雑誌記事、公文書、同窓会誌等々の資料収集を並行して進め、口述資料と文字資料の照合検討をとおして、戦後を生きた彼らの実生活との関連で生活史と精神史の全体像を解明した。

(2) 本研究代表者がこれまでの研究調査で築いた多くの台湾の人たちとの研究上のつながりを基盤に、その人たちからの大きな協力のもとに本研究の調査と資料収集を進め、台湾と日本の両方において、徹底的な実地調査を行った。

4. 研究成果

(1) 昭和 19 年に台南第二高等女学校を卒業し、総督府海外派遣篤志看護助手に志願した

女性は、カリフォルニア在住の一つ下の妹と端正な日本語で綴った手紙によって濃やかな思いや近況を伝え合っている。大学教員でカナダに住む娘とは主に電話を用いて台湾語で話すが、日本語で表現できるような複雑なことは伝えることがむずかしい。台湾にいる孫たちは北京語しか話せないの、意思疎通を図るのが容易ではない。「私たちの世代がいちばん可哀相なのですよ。」と彼女は語る。

台中商業学校を昭和 20 年に卒業した男性は、終戦から 5 年後に台中の貿易会社大信実業股份有限公司に 2 年余り勤めて日本との貿易業務に従事したのち、31 歳のときに招徳貿易股份有限公司を設立し、浜松の渡辺楽器商店、福岡の三笠化学工業会社、大阪の日本電炉などと取引し、楽器部品・農薬・自動車部品・モーターなどの輸入販売で会社を大きくした。国民学校校長退職後同社の顧問を務めた男性は、台中農業学校を卒業して、二人は日本語と台湾語を混ぜて話すのが意思疎通に最適だという。台南第一高等女学校から日本女子大学校に進んだ女性は、「日本の文化や社会観道徳観から離れては生きられない。」と話す。

(2) 台南麻豆の製糖工場に勤務した男性を探し当てた本研究代表者大谷は、戦中に神奈川の高座海軍航空廠少年工に応募し戦後帰国して国営となった製糖工場に就職して現場一筋に勤め上げた彼の半生を記録した。彼の兄は戦前の明治製糖会社から事務員として勤めたが、戦後は大陸から来住した人たちが事務部門に入ったため、台湾人の新規採用は現場のほかでは困難だったという。日本時代の教育と工場の管弦楽団、戦後の製糖工場と地域の変化を丹念に跡付けた。

製糖工場に勤めた男性に会えたのは、一人の女性への取材がきっかけとなった。彼女の父は戦争末期にスパイ容疑で日本警察に逮捕され、戦後は兄が二二八事件で射殺された。彼女は、1950 年代に日本の高等学校に留学し短大を卒業して、帰国後は台湾社会の福祉の向上に尽力した。

終戦の翌年に広東第二陸軍病院から復員した篤志看護助手だった女性は、中華民国国民政府軍将校の青年と結婚し、国府軍兵士と家族の福祉に尽くすとともに、日本との社会的・経済的交流に力を注いだ。彼女の夫は、実は 1944 年に中華民国南京政府から日本の陸軍士官学校へ留学した体験があった。

彼女の夫は故人になっていて、日本の陸軍士官学校留学当時の経緯やその後について、直接口述資料を得ることは不可能だったが、幸い彼と同期の留学生を見つけ出し、取材に応じてもらうとともに、写真、手記などの貴重な資料の提供を受けた。

戦後、大陸から台湾に逃れた国府軍軍人とその家族のために台湾各地に建設されたのが、軍人家族村であった。軍人家族村が建設

されるまでは、小学校(日本統治時代からの国民学校)の校舎などを接收して、国府軍軍人とその家族が住んだ。その状況は、上海生まれで国府軍将校と結婚した女性への取材と、本研究の調査によって明らかになった。彼女は、戦中に上海の日本企業に勤め、戦後国府軍将校と結婚したが、国境内戦で共産軍に追われ、夫とともに青島から台湾に向かう最後の船に乗った。

(3) 終戦の時、台北第二中学校の生徒だった男性は、いわゆる「国語家庭」の認定を受けた両親のもとで育った。戦後、中華民国の統治下に入った台湾で、「国語」は北京語を指すのは言うまでもないが、戦前はもちろん日本語であった。日本語を常用する家庭は、「国語家庭」、あるいは「国語の家」と呼ばれた。

彼の父は、台南の商業学校を出たあと、調理士試験を受けるために神戸の商科大学へ行ったようだが、難しく受からなかったという。その後、三井商社の社員となった父は、東京勤務となり新宿区柏木に住んだ。この柏木で、1932 年に彼が生まれた。母の実家は、台南の赤嵌樓の近くにあった。母方の祖父は、漢文ができたが、父方の祖父は 1 字も読めなかった。母は彰化高等女学校に進学し、結婚前には公学校の教員心得として勤めていた。

東京の柏木で 4、5 歳まで過ごした彼には、成子坂や淀橋、通っていた幼稚園や住まいの近くにあった警察派出所などがうっすらとした記憶の中に残っている。

彼が台湾に帰ったのは、盧溝橋事件前後だったろうか。父は、台湾に赴任した日本人に 6 割加俸があることを本島人(台湾人)に対する差別だと批判する文を『台湾日日新報』に投書したことで、上役に呼ばれ「君はあしたから入社するに及ばず。」と言い渡され、首を切られた。後に、親から聞かされたことだという。首を切られたあと、父はある人の紹介で日清製粉の台北支店に就職し、その後ずっと同社の社宅に住むことになった。終戦後、「日産」と呼ばれた社宅と敷地は、中華民国政府から安い値段で払い下げられた。彼は、木造の日本家屋だったその社宅を、のちに建て坪 58 坪の鉄筋コンクリート 4 階建てに建て替え、現在はその 4 階に妻とともに住んでいる。

台湾に帰ってまもなく、彼は台北の日新公学校に入った。国語常用家庭に育った彼は、日本人が通う小学校に入れた。だが、父は「日本人の子供といっしょになると、いじめられたらいけない。」と言って、台湾人の子供が通う公学校に入学させた。

1945 年 2 月に公学校を卒業した彼は、4 月に台北二中に進学し、終戦後建国中学校と改称した新制の初中 3 年、高中 3 年を経て、1951 年に台湾大学工学部電気科に進み、1955 年に卒業した。

卒業後、国府軍(中華民国軍)の少尉とな

って、1年間兵役に就いた。除隊して電力会社に就職したが、その後また召集があって軍務に就いた。現役の時は歩兵将校だったが、歩兵ではつまらないと思って試験を受け、政治作戦科の将校になった。試験は語学が中心だった。英語や日本語試験があった。英語は得意であり、日本語は後に学んだ北京語とは異なり、生育過程における日常語であった。

政治作戦部隊は、台北の北投に置かれていた。戦後しばらく、保安警察隊が入っていた同じ場所である。彼が政治作戦部隊にいたのは、1960年代の初め頃である。彼は、政治作戦部隊での訓練や、日本から招かれた旧日本軍将校団「白団」について語った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

大谷 渡、記憶の中の台湾と日本(9) - 統治下に育った人びとの戦後の軌跡 -、関西大学文学論集、査読無、第64巻第4号、2015、pp.1 - 22

大谷 渡、台湾人の戦後と日本の記憶、国際シンポジウム 日本の近現代と台湾 - 文化の継承と変遷 - 研究報告集、査読無、2014、pp.1 - 10

大谷 渡、記憶の中の台湾と日本(8) - 統治下に育った人びとの戦後の軌跡 -、関西大学文学論集、査読無、第63巻第4号、2014、pp.1 - 23

大谷 渡、記憶の中の台湾と日本(7) - 統治下に育った人びとの戦後の軌跡 -、関西大学文学論集、査読無、第62巻第4号、2013、pp.35 - 58

大谷 渡、台湾の中の戦後日本、国際シンポジウム 台湾と日本の戦前・戦後 研究報告論文集、査読無、2013、pp.15 - 22

[学会発表](計3件)

大谷 渡、研究課題「戦後日本の社会生活史と台湾 - 統治下に育った台湾人の日本認識とその変遷の記録化」調査の「『台湾の戦後日本』を出版して」について、国際シンポジウム『台湾の戦後日本 敗戦を越えて生きた人びと』出版記念、2015年10月5日、関西大学(大阪)

大谷 渡、研究課題「戦後日本の社会生活史と台湾 - 統治下に育った台湾人の日本認識とその変遷の記録化」調査の「台湾人の戦後と日本の記憶」について、国際シンポジウム 日本の近現代と台湾 -

文化の継承と変遷 -、2014年3月15日、関西大学(大阪)

大谷 渡、研究課題「戦後日本の社会生活史と台湾 - 統治下に育った台湾人の日本認識とその変遷の記録化」調査の「台湾の中の戦後日本」について、国際研討會 臺灣與日本的戦前・戦後、2013年3月15日、国立台湾海洋大学(台湾)

[図書](計1件)

大谷 渡、東方出版、台湾の戦後日本 敗戦を越えて生きた人びと、2015年、226

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等
無

6. 研究組織

(1)研究代表者

大谷 渡 (OHYA, WATARU)
関西大学・文学部・教授
研究者番号：80340644

(2)研究分担者

無()

研究者番号：

(3)連携研究者

無()

研究者番号：